Prof. A. Hillの 細胞生物学的日常

Episode 5

月 日，院生H君が集めている発泡酒のおまけのフィギアのなかに本特定領域班員を発見し，皆で大喜びした。私も古くはグリコのおまけ，最近では海洋堂もの（「日本の動物」シリーズやペンギンシリーズ）を集めた経験がある。海洋堂の登場は，おまけの歴史を変えた。あれ，ほんとよくできています。私もチョコエッグの大人買い（おまけ目当てに大量に買うこと）をして子供時代のうっぷんを晴らしたくちである。しかしああいうおまけ（食玩って言い方は嫌い）は，集めだすと全部揃えたくなるヒトの習性につけ込んでいるなあ。なにしろ，幼少のみぎりよりもの集めは好きだった。土に埋まっていた古釘（なぜ？　自分でも分からん。他にもゴミみたいな物を集める癖があった）に始まり，グリコのおまけはもちろん，レゴ（デンマークのブロックおもちゃ。自由に組み立てて遊ぶものだが，部品を次々と欲しくなる。熱中しすぎて我が脳髄は半分以上レゴと化していた。今でも見かけると，魂がうずく），マッチボックス（マッチ箱を模した紙の箱入りのミニカー。たしか英国原産。今でもあるらしいが，我々の頃のパッケージが，一番風情がある。従兄弟と所有車両で勝負していた。数よりかっこよさが重要。しかしスポーツカーがベストという訳ではなく子供なりの渋い美意識があった），鉄道模型（HOゲージ。でも高価なので少しだけ。恨みを晴らすため，長男が生まれるとTOMIXを買い与えた。しかし壊すからと子供に触らせず自分が遊んだ），漫画雑誌の帯シール（知らない人にはどんなものか分からないだろうなあ…），岩石鉱物，化石（子供なのでたいしたものは取れないが，日が暮れるのにも気づかず関東ローム層を一生懸命掘っていた），昆虫（幼稚園のころ，昆虫採集から帰ると玄関先でカマキリが仁王立ちしていて怖くて家に入れなかったという情けないトラウマ有り），貝殻，切手，外国のコイン，酒蓋（一升瓶のふたのコルク部分を取ったものである。地面に置いた相手のふたにふちをかけてピシッと裏返せたら勝ち で，相手のをぶんどる。勝負より色々な種類を集めるのが面白くて，酒屋巡りをした。），メンコ，ビー玉，消しゴム，図鑑（宇宙の図鑑とか，歴史の図鑑とか，一時流行した。図鑑ってそれ自体知識の蒐集みたいなところがある。そういう意味で百科事典も好きだった），電子回路部品（ゲルマニウムラヂオを作ったりしていた），プラモデル（第2次世界大戦の戦車と戦闘機。作るのが主目的だが，やはり並べて喜んでいたから蒐集のうちだと思う。田宮さんにはお世話になりました。星2つが目印のタミヤ模型。しばらく前に社長さんが書いた「田宮模型の仕事」を読んだら懐かしくて…　母親は人殺しの道具じゃないかと眉をひそめていたが本人にはあまりそういう意識は無かった。塗料を揃えるのも楽しみだった。何年頃のドイツ機甲師団サハラ砂漠仕様のベージュとか，やたらマニアックなものを売っていた。当時は驚くべきことに溶剤はシンナーだったので，部屋にこもって塗っていると朦朧としてくる。シナプスかなり減らしたかな…）。以上小学校までの自分史。長じても何かと集めている。色鉛筆，ポストカード（観光絵はがきじゃなくて絵画の。東京のon Sundaysという美術関係の店はたくさん揃っていて，見ているだけで楽しい），ワインのエチケット（ラベル。ただし安物に限定して。もしくは限定されて。もうやめてしまったが），B社のコップ，スウォッチ，ガラス製ペーパーウェイト，ペンギン関係，アヒル関係（後述），etc. etc...。特定の小説家や詩人の本を揃えるのも蒐集に近いか。何かまだまだあった気がするが，今すぐに思い出すのはこんなところ。ただしどれを取ってもコレクションというほどでもないのが根性無しな性格を示している（たとえ誇れるほど揃っていたとしても，だから何？，ではある…）。なお高級腕時計だの，本物の車だの，骨董品だの，絵画だのに目もくれずチープ系一筋というのは我が矜持である（単に金がないだけだが）。

チャーリあま先生ごめんなさい。ネタにさせて頂きました。

これって，しかし，オタクですな。今後の日本の主要輸出品はオタク文化だそうで，そういう明日の日本を担うアキバあたりに群れていらっしゃる電車男型真性オタクの皆様とは種類が違うにしても，精神性はオタクなのかもしれない。オタクかどうかはさておき，この物を集めるという習性はかなりヒトの本質に根ざしているのではなかろうか。鳥や昆虫にも物をコレクションする奴がいると聞くから，種を超えた生命の本質かも知れん，ってそれは大げさ。（誰か，「趣味」でアミノ酸を揃えているバクテリアとか見つけてくれないかな。）蒐集癖と人間性についてはきっと哲学で論じられているに違いない気がするが，浅学ゆえ知らない。ご存知の人，教えて下さい。ともかく人は呆れるくらい何でも蒐集する生きものだ。私の集めてきた物などはいたってポピュラーで，多くの人が辿る道にすぎず意外性に乏しいが，マンホールの蓋，箸袋，蔵書印，ジュークボックスから入れ墨入りの皮膚標本，拷問の道具まで，人が集めない物はないのではなかろうか。意味不明でも本人は大まじめなところがオモシロ哀しい。ところで，蒐集癖傾向を持った人間が明らかに多い集団がある。研究者。もの集めは男の専売特許という俗説より，ゼッタイ確実だ。昆虫採集で有名な先生はたくさんいるし，そこらの研究者も叩けば何か集めていることを白状するはず。怪獣王ブースカの全番組DVDとか（S先生ごめん）。叩くときは要注意。一晩中蒸気機関車の写真見せられたりするはめになるので（M先生ごめん）。蒐集癖を持つ研究者は相当数に達すると睨んでいる。そもそも網羅的解析とかファミリーの

たんぱく質片っ端からやるとかってのも，そういう衝動が原動力ではなかろうか。一度生化学会か分子生物学会で参加者全員，名札に自分が蒐集しているものを書いたら面白いと思う。そうかー，あの偉い先生，見かけによらず女性ものの下着集めてるのかあ，とかはまずいけど。

教授室への来客は，ソファに座ってこれらと対峙することになる。

ところで，このNLの読者は誰も気付いていないはずだが（…），アヒル関係のグッズが私の身辺に多い。私はアヒル好きということになっていて，皆さんが下さったり自分でも買ったりするのでいつのまにかコレクションになってしまった。大学院生時代，自分の試薬瓶やピペットマンにアヒルの簡単なイラストを描いたのが始まりなので20年以上という長きに亘る。当時所属したラボは文盲の人が多く，インドの選挙みたいに各自のシンボルマークがあった（この文，前半は偽りです。当たり前だ）。私はアヒルで，某さん（現在K大教授）は自分のイニシャルを組み合わせてあだ名のネズミの顔を作り，某さん（現在O大教授）は出身高校の校章（イモ虫の絵かと思ったら，その高校を経営する某有名寺院の仏殿の大屋根の端っこについている鴟尾，シビと読む，なんだそうな）。そのシビ某先生のラボには，まだアヒル絵入りガラス瓶があって学生さんたちに何じゃこりゃと不思議がられているらしい。こうなるともうアルタミラの洞窟絵に近い。では何故おまえはあひるが好きなのか？　国内外で何度も尋ねられてきた質問である。しかし，自分でもよう分からんのですわ。何となく好き。風呂に浮かべるビニールのアヒルが，私にとってのプロトタイプ。あの脱力感というか，とぼけた感じ，外し具合に妙に惹かれる。それを荒海に浮かべた白黒写真をどこかで見て，過酷な現実と間の抜けた表情のアンバランスが良いなあと思った。あのアヒルのように飄々と生きられたら…。そういや，スイスのバーゼルで訪問先の教授がライン川でビニールアヒルを浮かべて流すレースを今日やるぞとわざわざ教えてくれたこともあった（見に行けなかったが，鉄腕ダッシュのアヒル隊長も参加したかな…）。あひるは，正面から見ると妙に目の間が離れていて，私もそうであるため親近感を持っているという説もある。確かに私は，顕微鏡の双対眼レンズ間を広げたことはあっても縮めたことはないというタイトル保持者ではある。以前一緒にやっていた技官の人は逆のタイトル保持者だったので，二人で交互に顕微鏡見るときは，グワーッと広げたりグワーッと縮めたり忙しいことこのうえなかった。話が脱線したが，ともかく動機不純，じゃない不明瞭のままアヒラーを続けている。谷川俊太郎の真空管ラジオや安西水丸のスノードームや横尾忠則の涅槃像のコレクションのように洒落ていないし，40代も後半のおぢさんとアヒルの組み合わせは「ゲッ，キモイ」と言われかねないのはさておき（おいちゃいかんか），ボスの人格が疑われ研究室の将来を閉ざすことになっている可能性は危惧すべきかもしれない。教授室に初めて入って来たお客さんや業者さんが，陳列されたアヒルの大群を見て一瞬たじろぎ次に見なかったことにしようとするのを，面白がってちゃいけないのかも。でも役に立つこともある。昨年，この研究所にScience誌のシニアエディターがやってきた。いくつものラボを精力的に回ったあとの晩餐の席で訪問の目的を聞かれた彼女は，「メールや電話ではなく，じかに研究者と話をするために来た。実際今日もダックがいっぱい置いてあるオフィスがあって，訪問してみなければ分からないなまの研究者の一面を見ることができた。」と宣ったのだった。学生諸君，Top Journalへの道は，まずアヒルグッズを集めてエディターに印象づけるところから始まると心得よ。

＊＊付記1：Scienceのエディターの話には続きがある。私も夕食に同席したのだが，彼女はダックの持ち主が私だということはすっかり忘れていた。だめじゃん，それじゃ…　だがその後，私達がScienceに投稿していた論文（ハンドリングエディターは別の人）に対し，こいつ頭悪いんじゃないかというレフリーがいちゃもんをつけてきた際に，彼女はエディターに相談しろというアドバイスをしてくれ，お陰でacceptされたから，やはりアヒルには感謝しなくては。

＊＊付記2：私の好きな版画家の山本容子さんのリビングに，バリ島で作られた竹製の素敵なアヒルの彫刻があるのを雑誌で見た。山本さんもアヒル好きだと知ってしばらく幸せだった。

＊＊付記3：アヒルと同じぐらいペンギンも好ましい。飛べない鳥好きか。ピングーもいいし，本物もいい。アヒルの本物は不得意だが。ところでDennis Traut著Thomas Calenberg絵，谷川俊太郎訳の「ペンギンのペンギン」という本，ペンギン好きにもペンギン嫌いにも一読を勧めたい。深遠なペンギン哲学の世界。

研究室旅行でアヒルの攻撃を受ける私。少し離れたところに居たアヒルの群れから，突然一羽が猛然と走りよって来て足に噛み付いた。真意は不明。アヒルの側では私は好まれていない，らしい。